

活動報告

ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学主催 International Week 会議への参加・活動報告

藤原奈津美, 星野由美*, 杉本真美**, 土井登紀子**, 日野出大輔*

平成23年3月13日から19日までフィンランドの首都であるヘルシンキに渡航し、14日から5日間開催されたヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学・保健看護学部主催の International Week 会議に出席した。この会議はその名の通り、看護師、保健師、歯科衛生士等の養成に係わる世界各国からの教員が集結し、国境の垣根を越えて学術発表や意見交換を行いながら交流を深めるものである。主催大学であるフィンランドのほかに、オーストリア、オランダ、ザンビア、カナダ、ロシア、ポルトガル、イギリス、ベルギー、デンマーク、マラウイ、日本と12カ国の教員が集結した。徳島大学からは口腔保健学科教員3名と医学部保健学科の多田敏子教授と岡久玲子助教の計5名が出席した。また今回は、四国歯学会からの支援を受けて、口腔保健学科から学生2名が参加することができた。

TuulaToivanen-Labiad 先生のご好意もあり、International Week 会議の参加に付随して、メトロポリア応用科学大学の歯科衛生士（フィンランドでは Oral Hygienist と呼ばれる）養成コースの授業風景や臨床実習施設を視察し、学生はその授業に参加することもできた。また、ヘルシンキの隣町に位置するエスポー市にある社会福祉施設ビヘルコッティ（Viherkoti）を見学する機会を与えていただいた。短期間ながらも充実した内容であった。

今回のフィンランド渡航において、Ⅰ. International Week 会議への参加・活動、Ⅱ. 社会福祉施設ビヘルコッティの視察、Ⅲ. 学生による参加活動と体験による気づきの3項目に分けて以下に報告する。

Ⅰ. International Week 会議への参加・活動

看護師養成コースのある Tukholmankatu の校舎にて、本会は開催された（図1）。今回、日本から参加した教員は皆初めての出席であったが、会議の控室に案内されると、他国の教員たちは顔見知りの仲間たちの久しぶり



図1 International Week 会議が行われた講義室

の再会を喜び、話に花が咲き、国境のない和やかな雰囲気の中で International Week が始まった。

開催期間中、毎日テーマが設けられており、第1日目は“Travelling and global health”，第2日目は“Health Promotion”，第3日目は“Patient safety”，第4日目は“Infectious diseases and prevention”，そして最終日の第5日目は“Migrants and health care”であった。その中で私達一行は、第1日目と第4日目の口演発表および第2日目～第4日目のポスター発表に参加した。

1. 口演発表

第1日目：会場には保健看護学部の学生も集まりほぼ満員の状態で、開会宣言が Elina Eriksson 学部長により行われた。開会に先立ち、3月11日に日本で発生した東日本大震災で被災され、亡くなった方のご冥福を祈って、出席者全員で黙祷を捧げた。フィンランドの方々の暖かい心遣いを日本人として強く感じながらの開会であった。

この日の午前はアメリカの看護師教員より“フローレンス・ナイチンゲールの志を受け継いで”という題目

徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部口腔保健支援学分野

*徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部口腔保健衛生学分野

**徳島大学歯学部 口腔保健学科4年

で、オーストリアの看護師教員より“多文化社会における性的健全プログラム”という題目での口演発表が行われた。口演後は学生や他国の教員からの質問が相次ぎ、活発な意見交換がなされた。

第4日目：Infectious diseases and preventionが主題であったが、午前は歯科衛生士教育に関連する発表が続く。各国の歯科衛生士教員と同大学の口腔保健学科の学生が集まりスタートした。始めに徳島大学歯学部口腔保健学科について、藤原助教は本年度初めて輩出された卒業生の進路と、大学院修士課程について紹介した(図2)。続いて日野出教授より、“Tongue Coating and Oral Malodor”という題目で約45分のレクチャーが行われた。口臭は非常に注目される口腔の悩みであり、聴衆は興味津々の表情で聞き入っていた。質疑応答では高齢者服用薬の副作用による口腔乾燥と口臭との関連性や、ガスクロマトグラフィーによる口臭測定についての質問などがあった。

次に、メトロポリア応用科学大学口腔保健学科生である Ailikki Nurmine さんと Elina Nakamura さんにより、昨年留学生として訪れた宮城高等歯科学院と本学で学んだことを中心に報告が行われた(図3)。二人が流暢に英語をしゃべる姿はとても誇らしかった。他国の学生である彼女たちの報告を聞き、改めて我々日本の歯科衛生士業務の幅は広く、将来が期待できるものであるとより実感した。オランダ、アムステルダムの歯科衛生士教員の Loes van der Maesen 先生の口演では、オランダの歯科衛生士は歯牙の切削なども業務範囲であり、歯科医師との職域が問題となっているという内容であった。

午前のプログラムの最後には、本学学生によるプレゼンテーションの機会を与えてくださり、学生は貴重な体験をすることとなった(詳細は後述)。フィンランド語による挨拶は、メトロポリア応用科学大学学生からの笑顔も見られ、彼女らの心を掴んでいた。聴衆からは歯科衛生士とともに社会福祉士のライセンスが取得できるということにとても感心された。学生の発表に対して Moderator でもあった Tuula Toivanen-Labiad 先生からもお褒めの言葉をいただいた。

2. ポスター発表

第2日目～第4日目のポスター発表は、口演会場に隣接する会場にて実施され、本学からは星野助教が“Introduction of the clinical basic training using new teaching device and evaluation by OSCE for the dental hygienist education in The University of Tokushima”という題目にて発表した。これは2010年に発売されたプロービング用顎模型を導入した本学での基礎実習の教育効果を調べたものである。従来の顎模型を使用して実習を受けた学生の技能との比較を OSCE により評価した結果、測定値の正解率には両者に差は認められないが、新たな顎模型を用いた学生では、測定時間が有意に短くなったことを



図2 本学科の紹介と進路についての口演発表



図3 留学生による日本での体験報告

報告した。本発表では、実習に使用した顎模型とプローブを参加者に試していただく機会を作ったので、参加した各国の歯科衛生士養成校教員やメトロポリア応用科学の歯科衛生士学生に興味深く公聴していただけたと思われる(図4)。

II. 社会福祉施設(ビヘルコッティ)の視察

徳島大学歯学部からの5名は、第1日目午後から Nurmine さんと Nakamura さんとともにエスポー市にある社会福祉施設を訪問したビヘルコッティ(Viherkoti)は、フィンランド語でグリーンホームの意味である。この高齢者施設は、地域の高齢者施設の中でも入所希望者が多く、病院と在宅の方がそれぞれ70名待機しているとのことであった。ビヘルコッティの名称が意味するように、施設内は天然木材を基調とした造りで、温かさや落ち着いた雰囲気でも充実しているだけでなく、利用者の生活機能を向上させるような環境が配慮されていた(図

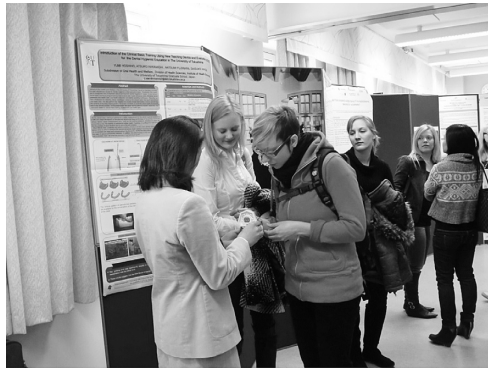


図4 ポスター発表



図5 ビヘルコッティ施設内のパティオ



図6 救急蘇生法の実習参加



図7 器械によるシャープニング体験

5)。施設内の案内表示は、フィンランド語とスウェーデン語で示され、1-2階は利用者の居室、地下1階はクラブスペース（ジム）、カフェテリア、工芸などが楽しめるスペース、浴室、フットケア、美容院等が完備されていた。入所者の居室および各フロアの廊下は中央広場の吹き抜けに通じているので、そこから合唱やイベントの様子を眺めることや、寝たきりで見に行けなくてもイベントの雰囲気を感じることができる。このような全員参加型の環境が、利用者の自立を促し、生きる力に繋がっている様子が伺えた。

各居室には、利用者に勧められている運動メニュー、口腔ケアの方法、その他利用者の健康に関する情報が掲示されており、利用者自身、全てのスタッフ、家族や訪問者などが関われるようなシステムが定着していた。スタッフは、利用者の生活に溶け込んでおり、介護やケアが業務的な態度と感ぜさず、温かく日常的な雰囲気で行われていたのが印象的であった。

Ⅲ 学生による実習等への参加・活動と体験からの気づき（参加学生の感想から）

International Week 会議の第2日目に、歯科衛生士養成コースのある Mannerheim の校舎を訪ねた。まず、救急蘇生法の実習を見学させていただき、実際に心臓マッサージと人工呼吸を体験することができた（図6）。そ

の後、2年生のファントム実習を見学させていただいた。一人ひとりファントム模型を使い、スケーリングの練習をおこなっていた。一見、日本での実習と差異はないように思えたが、使用していたスケーラーを見せてもらったところ、私たちの実習では使ったことのない形状のスケーラーがあり、とても興味深かった。

次にヘルシンキ大学歯学部学生も実習を行っているヘルシンキ・ヘルスセンターを訪ね、歯科受付業務の実習の見学をさせていただき、診療室の概要説明を受けた後、4年生の臨床実習と3年生の相互実習を見学させていただいた。診療室の概要説明の中で日本と大きく違うと感じたことは、シャープニングをする際に専用の機械を用いておこなっていること、小児に対しても電動歯ブラシが第一選択としてブラッシング指導をおこなっていることであった。実際にシャープニングの機械を使用させていただいたところ、初めての体験であったため、少し手間取ってしまったが、慣れれば短時間で、確実にシャープニングをすることができる方法だと感じた（図7）。3年生の臨床実習を見学した際、日本と同様に電子カルテを用いていたのだが、写真（図8）のように一目で口腔内状態を把握することができるシステムを用いており、日本でも応用されることを期待したいと感じた。また、3年生の相互実習では診療中の緊急時の応急対応について学んだ。体位変換、酸素吸入、アドレナリ

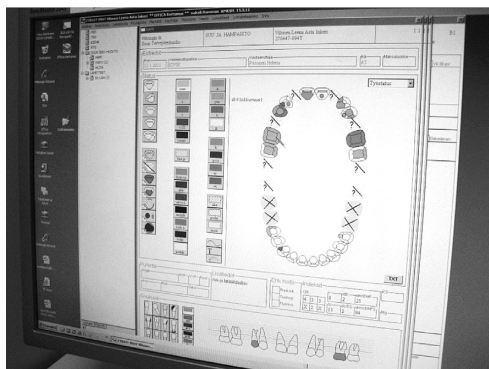


図8 ヘルシンキ・ヘルスセンターの電子カルテ



図9 本学生による口演発表

ン注射など、今まで学んだことのない応急対応を学ぶことができた。翌日も診療室での臨床実習に参加し、歯面研磨の相互実習を行った。バキュームチップが3種類あり、患者にあわせて選択できること、フッ化物洗口剤を診療室で使用することなど、多くの事項で日本との違いを実感した。

診療に特化した応急処置、日本では使われていない多様な機材を用いた相互実習など今まで受けたことのない実習に参加できたり、メトロポリア応用科学大学の学生や先生方とも交流できたりと、とても有意義な時間であった。今回の経験・交流を今後活かしたいと考えている。

第4日目はInternational Week会場にて「The actual state of School of oral health and welfare, Faculty of dentistry, The university of Tokushima」という題目で15分間の口演発表の機会をいただいた(図9)。昨年と一昨年にメトロポリア応用科学大学から日本へ来た学生との交流の様子を交えつつ、私たち口腔保健学科の学生が受けている授業について学年を追いながら説明させていただいた。また、私たちの学科の特色でもある歯科衛生士と社会福祉士のダブルライセンスを取得できる学習環境の話もさせていただいた。一見全く異なる職業に思えるが、医療や福祉を提供するうえで人を支援することやその人の立場になって接することは、歯科衛生士も社会福祉士も同じ考え方であるということを伝えた。また、社会福祉を学ぶことにより、歯科衛生士として福祉のマインドと視点をもって患者と向き合えることもできる多面性があるということをお話させていただいた。

最後に

上述したように、今回参加した学生・教員とも、非常に貴重な、そして今後の教育・研究活動の飛躍に繋がる有意義な体験および交流ができたと感じている。また、上記以外にも、今回の訪問では、学術交流協定を締結している徳島大学歯学部とヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学との学生交換留学のあり方、および現在進めている「Evidence-Based Oral Health Promotion」共同研究の

詳細な討議を行うことも出来た。今後も、学生・教員など人材の交流を通じた同校との充実した国際交流を継続して行きたいと考えている。

謝 辞

ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学主催International Weekへの学生参加にあたり、ご支援いただいた四国歯学会および同大学との交流支援をいただいた株式会社トクヤマデンタルに対しまして、心よりお礼申し上げます。